関西自然保護機構会誌 *23*（*2*）：*215－216, 2001*

じゃまなやつは殺せ（山科からの手紙4）

京都大学名誉教授　四手井　綱　英

Kill the nuisance life (Letters from Yamashina 4). Tsunahide Shidei (*Emeritus Professor of Kyoto University*)

最近，子供による大人の殺害や大人による子供の殺害が多いようだ。これに就いて，私は根本的に考えてみた。それは,日本の鳥獣保護行政だ。鳥獣保護区というものは，日本各地に出来ている。ところが，この鳥獣保護区は必ずと言ってよいほど，農林業に有害な鳥獣はたちどころに殺しますと言う但し書きがつかなければ許可されない。それに鳥獣保護区を作る時は保護区に関係のある住民の賛成が必要で，それを得るために，農林業者の意見を聞くと，どうしても，この「じゃまものは殺せ」の但し書きをつけねばならないのだ。この話は以前の私の通信にも記したが，農民ばかりではなく，一般市民もノミ，シラミは殺した。しかし，カはあまり殺さなかった。「カ」やり火と言うのは昔からあったが「カ」取り線香は後から出来た。「カ」をさけるには，「カ」ヤの中へ人が入って，ささないようにした。夏になると子供達は，蚊帳（カヤ）に入って寝るのを夏の楽しみの一つにした。ホタルを捕まえて来て，逆にカヤの中にはなして喜んだりもした。「カ」も殺さなかったのだから，鳥や獣も，今の様にじゃまものは殺せのような乱暴なことはやらなかった。鳥は鳴子，案山子でおどかすとか，イノシシやシカは，田や畑のまわりに防御壁を作って入らないようにして，彼等が山へ帰って出てこないことを願ったものだ。科学の発達が，「じゃまものは殺せ」を推進した。

鳥や獣がしきりに田畑に出てくる年は山が不作だったのだと，同情すらしたのがすっかり，鉄砲や薬剤で殺してしまうことになった。殺菌剤，殺虫剤をはじめとして農薬は多岐にわたり開発された。鉄砲も発達した。極最近でも，単にタケノコを喰いに下りて来たクマが殺されている。人間以外の動物はじゃまなやつは殺してしまえに変わってしまった。こういう状態で，人だけは殺してはいけないということが，どうして説明できるだろうか。

私達は，自然や生物に関心を持つ，その研究を進めているものは，この地球上の総ての生物が永続して生存し，生物圏を作っていて初めて地球が立派に存続することになるのだと思っている。そのためには希少動物を充分に保護しなければならない。希少動物は原生林さえ残してやれば，それでよいというものではなさそうで，里山のように農用林として，ひどく荒らされた山林を好んで住むものもある。農林業をじゃまするものを殺していると，こういう動物もやられてしまうだろう。

オオタカやクマタカは希少鳥類と言われるが，両者ともしばしば，里山の峰に近いアカマツの大木に巣を作り，ひなを育てる。餌は農地や果樹に来るキジやハトを捕っている。私の家の裏庭へオオタカがキジバトやカラスを捕りに来る。先日も孫が見つけて，傷ついたハトを保護し,オオタカを追っ払った。後でそれがオオタカだと図鑑で知り，可哀相な事をしたと嘆いていた。ハトが餌だ

とは思わなかったのだ。

こうして，すべての生物が皆均等に扱われ，地球上に生存することで，地球の生物圏はうまく活動できるのだ。農業林にじゃまになるものは殺してもよく，人だけは殺してはいけないと言う理屈は成り立ちそうにない。

旧の西洋流に，動植物を通じて，人だけが生存を保護され，他の生物は人のために神が作られたもので，殺そうと生かそうと人の考え方によって，処理しても良いなどと言う規則が，現代では通らないのではなかろうか。そうなると，大人や子供，人のじゃまもの殺しをとめる手段がない。説得の手段としては，やはり総ての生物について，じゃまものは殺せをやめ，総ての生物が生きる権利を持つことを認める。その中でこれからの農林業へ害を与える生物にどう対処したらよいかを考える。

農林業の管理には人の怠慢も充分にある。例えば，滋賀県の東海道線沿いの湖東平野の田の中を走る汽車から見える景色では，人の姿が殆ど見当たらず，サギだけが，方々の田に立っている姿をよく見る。すこし以前は，自分の田には殆ど毎日誰かが行って，何かをしていたものだ。サギに代わり人が立って汽車を見送っていた。今の農業では薬剤を撒くとか，施肥する時以外は人は田に出ない。それで結構普通作はとれるようになった。農家の主人は町に出稼ぎに行って，田畑を主婦に任して出来る農業が，果たして進歩した農業なんだろうか。片手間で出来る農業が進歩した農業なのだろうか。人が出ておらないと，鳥獣は自分の領地だと思ってしまう。そしてわがもの顔で田畑を食い荒らすことになる。林業でも同様，以前は，誰かが自分の持ち山へは毎日弁当持ちで通った。そして枝打ちなどを少しずつやっていた。今は誰も行かない。クマは，人が山に入っておれば，皮剥ぎなんか殆どしない。先年山形で冷害があった時聞いたのだが，毎日自分の田を見回って，水の掛け方などちゃんとやった所は，冷害にかからなかったと言う。鳥や獣は，人がそうして田畑へ出ておれば，人の領分だと知っいて，あまり出ないし，害も少なくなる。なまけた農林業をやって「じゃまものは殺せ」は，野生鳥獣はたまったものではない。

話は大分飛ぶが，再婚した女の人が連れてきた先夫の子供が，よく新しい養父に殺されている。こういう話を聞くと私はインドのハヌマンラングールの例を思い出す。人がサルへ似てきたようで，考えさせられる。このサルも先夫の子を皆殺しにしてしまうのだ。